

# AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

日本小児看護学会会誌 (2011.03) 20巻1号:25～31.

検査・処置を受ける子どものケアを体験した看護学生の学び  
—小児看護学実習終了後のレポート分析から—

森 浩美、澤田みどり、岡田洋子

## 研究報告

# 検査・処置を受ける子どものケアを体験した看護学生の学び

—小児看護学実習終了後のレポート分析から—

森 浩美<sup>\*1</sup>, 澤田 みどり<sup>\*2</sup>, 岡田 洋子<sup>\*1</sup>

What did the students of nursing course learn through the care for the children  
who underwent medical examinations and/or treatments?

— Through the analyses of their reports from the practical training at the child-nursing unit —

Hiromi Mori<sup>\*1</sup>, Midori Sawada<sup>\*2</sup>, Yoko Okada<sup>\*1</sup>

<sup>\*1</sup> Asahikawa Medical University School of Medicine Nursing Course

<sup>\*2</sup> Asahikawa Medical University Hospital

### 抄 録

本研究の目的は、看護学生（以下、学生）が、検査・処置を受ける子どものケアを体験し、何を学んでいるのかを明らかにすることである。対象は大学で看護学を専攻し、小児看護学実習（以下、実習）を終了した4年次の学生35名である。学生が実習終了後に提出したレポートを質的・記述的に分析した。

その結果、学生の学びは、【子どもの特性】【不安・恐怖を緩和する物的環境】【安心につながるケア】【身体拘束の是非】【プレパレーションの意義・自己の課題】【子どもが主体となる医療・看護】という6つのカテゴリーで構成された。

学生は、実習で検査・処置を受ける子どものケアを体験し、その体験を通して、子どもを尊重することを学んでいるため、臨床と基礎教育の連携は重要であり、基礎教育を検討することは看護教育全体の課題であると考えられた。

**キーワード：**看護学生、小児看護学実習、検査・処置を受ける子ども、尊重、ケア体験

**Key Words：**Students of nursing course, Practical training at the child-nursing unit, Children who undergo medical examinations and/or treatments, respect, Experiences of care

## I. はじめに

日本看護協会（2009）は、小児看護領域における看護業務基準の中で、「子どもの人権を尊重し、子どもと養育者には、検査・治療・病状・処置などについて適時に説明し、納得・了解・理解を得るように努めること」とし、看護職の責務について述べている。しかし、現状は、検査・処置を受ける子どもに対して、看護師は説明が十分ではなかったり、納得を待ってからの看護ではなかったりと、子どもが尊重されているとは言い難い状況が窺える。

このような小児看護の現状の中、小児看護学実習（以下、実習）は、看護学生（以下、学生）が検査・処置を受ける子どものケアを体験でき、子どもを尊重することを学ぶ貴重な機会になると推察する。

丸山（2008）は、学生は医療処置や検査の場面を振り返ることで、子どもを尊重する関わりについて考える機会になっていると述べ、岩村ら（2005）は、学生は採血の場面で、泣く＝子どもはわかっていないと捉え、子どもの権利を守るのは難しいと感じていることを指摘している。ま

<sup>\*1</sup> 旭川医科大学医学部看護学科、<sup>\*2</sup> 旭川医科大学病院

受理：2010年12月11日

た、磯辺ら(2008)は、学生はプレパレーションを実施する過程で小児看護の特徴を学んでいたとし、蝦名(2009)は、実習でプレパレーションを実施した学生は、採血・点滴時に親の付き添いは必要であり、抑制はいけないという考えに揺らぎはなかったと報告している。これらの先行研究から、学生は子どもの検査・処置場面を通じて、子どもを尊重することについて学んでいると捉えられた。

そこで、学生が検査・処置を受ける子どものケアを体験して学んでいることに焦点を絞って、その体験や学びの内容を更に詳細に記述し、研究を蓄積していく必要があると考えた。

本研究は、子どもを尊重することについて学ぶ学生への基礎教育を検討するために、学生が検査・処置を受ける子どものケアを体験して、何を学んでいるのかを具体的に明らかにすることを目的とした。

## Ⅱ. 研究方法

### 1. 研究デザイン

学生が検査・処置を受ける子どものケアを体験して学んだことを、学生が記述したレポート内容から明らかにするために質的記述的デザインを用いた。

### 2. 研究対象者

対象者は大学で看護学を専攻し、病院実習を終了した4年次の学生である。学生が実習終了後に提出した「実習を通して学んだこと」というテーマの自由記述式レポートには、検査・処置を受ける子どものケアを体験して学んだことに関する記述が多く含まれていたため、分析の対象とした。

学生の小児看護学に関する授業は、3年次に講義と演習が組まれている。講義では、あらゆる健康レベルの子どもの看護を学びながら、子どもを尊重することについて学習し、演習ではプレパレーションの実践について学んでいる。実習は、3年次の保育所実習と4年次の病院実習(小児病棟・小児外来)で構成され、実習においても子どもを尊重することの重要性について学んでいる。

### 3. 分析方法

レポートを繰り返し読み込み、記述内容の意味

が損なわれないように、レポートの全文を単文化した。そして、研究メンバーで単文の中から、検査・処置を受ける子どものケアを体験して学んだことが記述されていると考えられた単文を抽出した。抽出された単文の類似性・相違性に基づき、統合、比較検討、再編を繰り返し、カテゴリー化した。分析の全過程において小児看護学領域の実践看護管理者と質的研究者の3名で分析・結果の妥当性を検討した。

### 4. 倫理的配慮

学生に、研究の目的と方法、実習課題として提出したレポートを研究目的で使用することへの許可を得たいこと、参加の自由性、参加辞退による不利益は被らないこと、レポートは実習課題であるため記名式であるがデータ処理に伴い匿名性を確保すること、学会等での結果公表、希望する対象者に結果を開示することなどについて文章と口頭で説明し、文章で同意を得た。

データ収集は、実習に影響を及ぼさないような4年次の学生全員が実習を終了し、学生に成績評価の結果を通知した後の2009年1月に行った。

## Ⅲ. 結果

4年次の学生全員(60名)に研究の協力を依頼し、35名から同意が得られた。

### 1. 分析の結果

学生35名のレポートにおける総単文数は1237であった。その中から、検査・処置を受ける子どものケアを体験して学んだことに関する記述をしていた学生は32名、単文数は216であった。サブカテゴリー20、カテゴリー6が抽出された。

学生は、検査・処置を受ける子どものケアを体験して、【子どもの特性】を理解し、特性に応じた【不安・恐怖を緩和する物的環境】や【安心につながるケア】について学んでいた。また、検査・処置を受ける子どもへの、【身体拘束の是非】を捉え、学生の見解は分かれていた。そして、学生は、【プレパレーションの意義・自己の課題】を見出し、【子どもが主体となる医療・看護】について学んでいた(表1)。

以下、カテゴリーを【 】, サブカテゴリーを〔 〕、レポートの内容を「 」で表す。

表1 学生が検査・処置を受ける子どものケアを体験して学んだことのカテゴリー・サブカテゴリー

	カテゴリー	サブカテゴリー
1	子どもの特性	子どもだからこそ感じる不安・恐怖 経験によって育つ子どもの適応力
2	不安・恐怖を緩和する物的環境	明るさや親しみやすさを演出する壁紙・玩具 処置中の気を紛らわせる玩具 子どもと看護師の仲を取り持つキャラクター柄エプロン
3	安心につながるケア	生活場所と処置室の区別 正確でスピーディーなケア 付き添う母親の存在 年齢・発達段階を踏まえた看護実践
4	身体拘束の是非	検査・処置の成功と安全のために必要な身体拘束 子どもに苦痛と恐怖を与える身体拘束
5	プレパレーションの意義・自己の課題	看護師に学んだ苦痛軽減の効果 実践して解かった子どもの不安や恐怖を取り除くことの難しさ 子どもと信頼関係を築けたことへの満足 プレパレーションに対する学習の深まり 気づいた自己の課題
6	子どもが主体となる医療・看護	子どもを褒めて労うことの大切さ 主体者である子どもへの説明 子どもの選択・意思決定 子どもの尊厳を守ることの重要性

### 1) 【子どもの特性】

学生は、「成人にとって身体計測や吸入など、あまり侵襲がないような処置であっても、児にとっては恐怖や不安を伴う処置になることも、改めて実感した」「小児にとっては、見知らぬ人が自分に何かをしようとしたら恐怖や不安を感じるのは当たり前だと思った」と〔子どもだからこそ感じる不安・恐怖〕について述べた。また、「子ども達も通院回数を重ねることによって、自分の処置に対して理解していく様子が見られた」「専門外来に何回も通院している子どもは、2歳ほどであるにも関わらず、注射や処置について理解して、その処置が終わらないと帰れないことも知っていて、注射時には自分から手を出し、大人しくしている姿を見た」と〔経験によって育つ子どもの適応力〕について述べていた。

### 2) 【不安・恐怖を緩和する物的環境】

学生は、「処置室にはおもちゃが置いてあり、体重計にキャラクターがついていて、患児が楽しみながら処置を受けられるような環境になっていた」と〔明るさや親しみやすさを演出する壁紙・

玩具〕に着目していた。また、「吸入器には象の絵が貼ってあって、鼻から吸入液が出るようになっていた」と〔処置中の気を紛らわせる玩具〕や、「看護師も患児に恐怖を与えないようキャラクターのエプロンをつけていた」と〔子どもと看護師の仲を取り持つキャラクター柄エプロン〕について述べていた。

### 3) 【安心につながるケア】

学生は、「子どもは処置室に移動することで、処置を受ける覚悟ができる」「処置室で処置を行うことによって、児は生活空間と処置室の区別を理解すると共に、絶対的に安全な場所を得ることができる」と〔生活場所と処置室の区別〕の必要性を感じ、「実施するのに時間がかかってしまうと小児に与える恐怖や不安を強めてしまう」「処置を受ける小児の看護では、恐怖心や不安のために小児が強く泣き、できるだけ、安全・安楽で速やかに処置を実施するための工夫が各所に見られた」と〔正確でスピーディーなケア〕について述べていた。

学生は、「児にとって母親が傍にいることで安

心できるため、母親に協力して児を抱っこしてもらい、付いてもらうことも小児にとっては必要なことであると思った」「親が傍にいてもらうことで安心感へとつながり、採血を拒否したい気持ちはあるが、親に励まされながら行うことで、頑張ろうという気持ち生まれるのを感じた」と〔付き添う母親の存在〕の重要性を感じていた。そして、「乳幼児に対しては象の形のネプライザーを用いて、学童期・思春期の小児に対しては普通の大人が使用するものを使っていた」「子どもも成長するにつれて理解力も増していき、年齢に応じた対応や説明が必要である」と〔年齢・発達段階を踏まえた看護実践〕について述べた。

#### 4) 【身体拘束の是非】

学生は、「実際の現場を見たことがない私にとって馬乗りを見た時は驚いたが、処置を安全に行うためには仕方がない部分もあると思った」「母親に退室してもらうのは、子どもが母親に助けを求めて暴れ出すのを防ぐために必要で、抑制すると暴れるのを防げる」「馬乗りになる行為には子どもの安全を守るという意味がある」と〔検査・処置の成功と安全のために必要な身体拘束〕という見解を述べた。

その一方で、学生は、「小児に対して馬乗りや海苔巻きをして抑制することは、子どもの尊厳を考えた時に反している行為ではないかと実感した」「注射針を穿刺する際に、母親に退室してもらい、バスタオルで身体を包み、押さえつけているのを見た時には、本当にこれで良いのだろうか、とても疑問に思った」「患児が処置で叫びながら泣いている姿、看護師が馬乗りになっている姿を多く見かけ、ショックだった」と〔子どもに苦痛と恐怖を与える身体拘束〕という見解も述べていた。

#### 5) 【プレパレーションの意義・自己の課題】

学生は、「看護師の接し方次第で、小児が感じる不安を軽減することができると思った」「ただ援助を行うだけではなく、患児の不安を理解し、そのときに一番、患児にあった援助方法は何かを良く考えて援助を行うことが大切なのだ」と〔看護師に学んだ苦痛軽減の効果〕を実感していた。そして、学生は、「身体計測を実施す

る時に、一生懸命になり過ぎて、表情が硬くなり、小児に対しても不安を解消させてあげられるような声かけができなかった」「コミュニケーションをとるにしても、上手く行えないことが多く、説明するにも言葉の選択に悩むことが何度もあった」と〔実践して解った子どもの不安や恐怖を取り除くことの難しさ〕を学んでいた。

その一方で、「自分がこれから行うことをまず説明してから実施するのを繰り返していると、徐々に患児からも、いつも来てくれる学生さんとやりたいという発言が聞かれた時には感激を覚えた」「笑顔で接し、十分な時間を取り、痛くないことや怖くないことを伝え、測定後は褒めて自信が持てるように関わることによって、患児との信頼関係も築けた」と〔子どもと信頼関係を築けたことへの満足〕も感じていた。

また、学生は、「実習に行く前はプリパレーションとは事前に絵本などの説明用具を準備して行うものかと思っていたが、近くにある縫いぐるみを使用して行うこともプリパレーションであると実習中に解った」「看護師は痛いことはしないということを母親と共に説明し、それでも患児が拒否する場合には、これから患児が行うことを実際に看護師が見せていて、これもプリパレーションの方法なのだと思った」と実習を通して〔プレパレーションに対する学習の深まり〕を感じていた。そして、「学生という身分で看護技術に未熟さはあっても、無言で行うことなく、患児の立場に立って、不安が最小限になるような声かけを行ってあげればと思う」「今後、小児に処置や治療の機会がある時には、積極的にプリパレーションを実施して行きたいと思う」と〔気づいた自己の課題〕について述べた。

#### 6) 【子どもが主体となる医療・看護】

学生は、「終了後には必ず、頑張ったね、痛かったね、協力してくれたから早く終わったよ、いい子だったね、などの励ましを行い、児にきちんと評価を行っていた」「処置後に頑張ったことを褒めることで、患児が自信をつけ、今後の意欲にもつながるため、処置後のケアも重要であると改めて感じた」と〔子どもを褒めて労うことの大切さ〕を実感していた。そして、「子どもだからと

いて、理解できないと考えるのではなく、理解してもらうためには、どのような説明をしたら良いのかという考えを持つことが大切である」「成人であっても小児であっても、処置をする目的を伝えることは非常に大切なことだと思った」と〔主体者である子どもへの説明〕の重要性について述べた。また、「不安を感じている患児に対して、手をつなぐ人を選択できるようにしていた」「看護師は子どもの話や質問に答えながら、子どものペースで行っていた」と〔子どもの選択・意思決定〕について学んでいた。そして、「子どもの尊厳を守ることは、医療現場においても大変重要であることを学ぶことができた」「学んだことは子どもの尊厳を守った上で、治療や処置を行うことの重要性である」と〔子どもの尊厳を守ることの重要性〕について述べていた。

#### IV. 考 察

##### 1. 検査・処置を受ける子どものケアを体験した学生の学びの特徴

学生は、身体計測や吸入など、大人では不安や恐怖を感じない検査・処置でも、認知・理解力が未熟で、経験の乏しい子どもにとっては不安や恐怖になるという、【子どもの特性】を学んでいた。また、学生は通院歴の長い幼児初期の子どもが、おとなしく注射を受けている場面から、子どもの適応力は経験によっても育つということを感じていた。これらは、学生が認知・理解力の未熟な子どもにとって、経験は重要な学びの機会である、と捉えていたことを示していると推察する。

学生は、検査・処置を受ける子どもの【安心につながるケア】として、子どもの発達段階を踏まえることや母親が付き添うことの重要性を挙げていた。しかし、母親が付き添うことについては、子どもが助けを求めて暴れるため、退室させたほうが良いと述べた学生もいた。平岩ら（2008）の調査では、乳幼児の採血・注射に親の同席は必要ないと答えた看護師は5～6割という結果を得ており、杉本ら（2005）は、採血・点滴を受ける子どもに付き添わなかった親は、その理由として「確認する間もなく連れて行かれた」「そうなりますからと言われた」など、医療者からの一方

的な対応であったとしている。このような先行研究からも、今回、対象となった学生が体験したことは、必ずしも特異的な体験ではないことが窺える。また、学生は検査・処置を受ける子どもへの【身体拘束の是非】について、検査・処置の成功と安全のために必要であるという見解と子どもに苦痛と恐怖を与え、尊厳に反するという見解を述べ、これらは、丸山（2008）の研究と同様の結果となった。

次に、学生は検査・処置を受ける子どもの不安や恐怖を取り除くこと、信頼関係を築くことの難しさを体験し、【プレパレーションの意義・自己の課題】を見出していた。益守ら（2001）は、学生は子どもとの援助関係を形成するうえで、対象を理解することだけを悩むのではなく、具体的にどのような声をかけたら良いのか、どのように関わったら良いのかを模索すると述べている。しかし、学生は、検査・処置を受ける子どものケアを諦めずに行い、その結果として、子どもと信頼関係を築くことができていた。そして、子どもを褒めて労うことや選択・意思決定を尊重することの大切さを知り、【子どもが主体となる医療・看護】について学んでいた。斉藤（2009）は、学生の看護の成功体験は、看護を学ぶ強い動機づけとなると述べている。学生は検査・処置を受ける子どものケアを体験しながら、成功体験や失敗体験を重ね、子どもを尊重することの重要性について学んでいたと推察する。

##### 2. 学生が検査・処置を受ける子どものケアを体験する意味と教育上の課題

学生は、子どもの一般的な特性に加えて、一人一人の異なる経験や個別性を捉え、それらの持つ意味を理解する必要がある。現在の少子化の中、学生は子どもと接する機会が少なく、病気の子どもの看護経験については皆無と言っても良いほどである。岩村ら（2005）は、子どもと接する体験の少ない現代の学生は、対象の理解から実習が始まると述べている。今回、学生は検査・処置を受ける子どものケアを体験しながら、対象の理解を深めていたことが示され、学生が実習で体験することの重要性が再確認された。

また、今回、対象となった学生は講義や演習に

において、既に子どもを尊重することの大切さについて学んでいる。それに関わらず、検査・処置を受ける子どものケアとして、母親を離すことや身体拘束をすることについて、肯定的な見解を述べる学生もいた。学生にとって、子どもが検査・処置を受ける実際の場面は、それまでの学びも揺るがすような体験になっていたことが窺える。そのため、学生は子どもを尊重しているとは言い難いような看護についても、「止むを得ない」とするような見解を持ったのではないかと推察する。斉藤(2009)は、患者に起きている現象や、患者との関わりによって経験した事実は、学生にとってかけがえのない教材になり、これらは指導者の意図的な関わりによって深化し、意識化されると指摘している。教員は、学生が体験したケアについて、学生と共に振り返り、子どもの安全を守ることや子どもを尊重することなどについて、学生に自己の考えやあり方を見つめさせる必要がある。そのうえで、教員は学生が捉えたことを受け止め、捉えられなかったことについては、学生の目が向けられるように示唆を与えることが重要である。学生にとって、何が子どもを尊重することなのかを模索することが、重要な学習の過程になると考える。

そして、学生は検査・処置を受ける子どものケアを体験しながら、子どもを尊重することの重要性を捉え、子どもが主体となる医療・看護について学んでいた。しかし、今回、学生が実習した病院では、検査・処置を受ける子どもから母親を離したり、身体拘束を行っていたりする状況もあり、学生の学びにも影響を与えていたことが示唆された。看護師は学生にとって行動のモデルである。看護師には、卒業後の学生が看護を実践する当事者になった時にも、看護の方向性を見失わないように、学生を導くという役割がある。小児看護を担う現在の看護師と、将来、看護師となる学生のために、臨床と基礎教育の連携は重要であり、子どもを尊重することについて学ぶ学生への基礎教育を検討することは、看護教育全体の課題であると考えられる。

### 3. 本研究の限界と課題

本研究は、実習終了後に提出されたレポートの

記述を分析したため、学生が実習中のどの体験を捉えて記述しているのかを特定することができず、その体験に対する指導内容も不明である。今後は、カリキュラムや実習プログラム、指導内容など、教育の特性を踏まえた調査を行うことが課題である。

## V. 結論

1. 学生が検査・処置を受ける子どものケアを体験して学んだことが明らかとなり、それは、【子どもの特性】【不安・恐怖を緩和する物的環境】【安心につながるケア】【身体拘束の是非】【プレパレーションの意義・自己の課題】【子どもが主体となる医療・看護】という6つのカテゴリで構成された。
2. 学生は、検査・処置を受ける子どものケアを体験して、子どもにとっての不安・恐怖を捉え、発達段階を踏まえた看護の重要性について学んでいた。
3. 学生は、検査・処置を受ける子どもへの身体拘束について、検査・処置の成功と安全のために必要であるという見解を持つ者と子どもに苦痛と恐怖を与え、尊厳に反するという見解を持つ者に分かれていた。
4. 学生は、検査・処置を受ける子どものケアを体験し、子どもの不安や恐怖を取り除くことの難しさ、子どもと信頼関係を築くことの難しさを体験していた。
5. 学生は、検査・処置を受ける子どものケアを体験して、子どもを褒めて労うことや選択・意思決定を尊重することの重要性を知り、医療・看護においては、子どもが主体であると学んでいた。
6. 学生は、実習で検査・処置を受ける子どものケアを体験し、その体験を通して子どもを尊重することを学んでいたため、臨床と基礎教育の連携は重要であり、基礎教育を検討することは看護教育全体の課題であることが示唆された。

## 謝辞

本研究にご協力頂きました学生の皆様に深く感謝いたします。

なお、本研究の要旨は第19回日本小児看護学会学術集会にて発表した。

## 引用文献

- 蝦名美智子 (2009). 教育と実践を結ぶ—子どもの力が発揮できる看護. 日本小児看護学会誌, 18(3), 63-67.
- 平岩洋美, 福嶋友美, 大西文子 (2008). 乳幼児の採血・注射時に親が同席することの現状と看護師の認識. 日本小児看護学会誌, 17(1), 51-57.
- 磯部尚美, 柴邦代 (2008). 小児看護学実習におけるプリパレーションからの学生の学び. 愛知きわみ看護短期大学紀要, 4, 117-127.
- 岩村徳子, 松井弘美 (2005). 臨地実習における子どもの権利の学習過程. 第36回日本看護学会論文集・小児看護, 137-139.
- 丸山真紀子 (2008). 看護学生が捉える入院中の子どもを尊重した関わり—小児看護実習を経験した学生を対象に—. 日本小児看護学会誌, 17(1), 65-71.
- 益守かづき, 中野綾美, 山崎恵美子 (2001). 子どもの権利を尊重する看護を学ぶ小児看護学実習. 看護展望, 26(9), 1038-1044.
- 日本看護協会編集 (2009). 看護業務基準集. 看護協会出版会.
- 斉藤茂子 (2009). 新カリキュラムで臨地実習をどう見直すか. 看護展望, 34(2), 102-114.
- 杉本陽子, 前田貴彦, 蝦名美智子他 (2005). 子どもが採血・点滴を受けるときに親が付き添うことについての実際と親の考え. 三重看護学誌, 7, 101-108.